昭和61年(1986年)10月10日　教皇様の聲　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
10　OCTOBER, 1986　毎月10日発行　第78号

教皇様の聲

救いの秘義を教えるロザリオ

皆さん、いとも聖なるロザリオの元后に捧げられたこの10月にあたり黙想中に思いついたことを二、三、お話したいと思います。病に伏す方方、そして友人であるみなさん全員、ご両親方、聖職者と宗教関係者の方方に心からお願いします。どうか、聖なるロザリオの祈りを毎日マドンナ(聖母マリア)に唱えてください。

健康は、もともと創造の計画の一部をなす善そのものですから、病者のために、病者と共に、病の床にある人々が癒されるよう、少なくとも苦しみから救われるよう祈りつつロザリオを唱えることは、まことに人間的かつキリスト信者にふさわしい行ないです。常に慰めとなり効果的な手段であるロザリオは、魂に平安と力を与えてくれます。病が長びき苦痛が去らないときでも、ロザリオは私たちに、人類の贖いは十字架を通してもたらされたことを思い出させてくれるのです。贖い主は愛ゆえに私たち人間の本性をお取りになり、私たちのために十字架上で救いを勝ちとってくださいました。この救いについての「玄義」を黙想するとき、教会のため、また、罪と過ちに陥った人々に恩寵を取り戻すため、神からもキリストや教会からも離れ去った人々を回心させるために、苦しみのもつすぐれた価値を深く悟ります。人知れず黙って耐える病者の苦しみは、百の議論よりもはるかに値うちがあるのです。

＊

十字架の聖ヨハネは書いています。「純粋な愛の発した火花は神の御目に、そして魂の目に、他の何にもまして尊くうつる。われわれは、愛するために造られたのだから。祈りも、神との一致もないところでは、骨折ってもすべてはむなしく、実りはなきに等しいか、全くないか、ときには害を及ぼして終わるだろう。」

＊

聖ベルナデッタの伝記を読むと、ロザリオを繰りながら、とりわけ力をこめて「罪人なるわれらのために祈り給え」と唱えていたことがわかります。それについて尋ねられたとき聖女は、「はい、そうです。私たちは罪人のために祈らなければなりません。マリア様御自身がお勧めになりました。私たちは罪人の回心のために、決して十分なことをしてあげられないからです」と答えました。病に伏してからは、「病気が私の仕事、苦しむことが私の勤めです。私の武器は祈りだけ。私にできるのは、祈ることと苦しむこと、それだけです」と。

＊

これはまた、ファチマの聖母が三人の子供たちに託したメッセージの内容でもありました。「苦しみとロザリオを、教会と罪人のために捧げなさい。」

病者のために働く人々は、ロザリオの祈りを通して、いつも親身で親切、忍耐強い心で苦しむ人々に接し、その苦しみに敬意を表わすための、力を授かることでしょう。(八五・十一)

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1986

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

平和は聖霊の賜

何千人もの大学生や大学教授とのローマでの恒例の集いが始まったのは一九六八年のこと。それ以来、一九六八年は大学生にとって意義深い年となりました。これはオプス・デイ創立者 神のしもべホセマリア・エスクリバー師のインスピレーションと励ましのおかげです。師は若者に対する司祭としての配慮から、聖ペトロの墓の傍で大学生と教授のみなさんが、カトリックの信仰を強めるため、教会への愛を増すために集うよう望んだのでした。以前参加した人々と同じようにみなさんも、ただ観光のためだけに――もちろん見物する時間もありますが――来られたのではありません。キリストのメッセージの絶えざる新鮮さをより一層深く理解するためです。みなさんがおいでになったのは、「心の中であなたたちのうちにある希望の理由を尋ねる人にいつでも答えられるように用意する」(ペトロ①3・15)ため。さらに、信仰と愛の徳を生かし、また全世界の青年たちと知り合って相互理解を深めるためなのです。(…)

平和は尊い善

平和についてはよく話題に上り、書かれ、また討議されている昨今ですが、同時に毎日のように平和への苛酷な攻撃を目にしています。戦争やテロ行為、堕胎、家族の分裂、自由の圧迫、さらに色々な国で国民全体が不当に扱われている、等。(…)

永遠の生命を忘れて自己の目的をこの世での生活のみに限るとき、人はみせかけの平和と、最少限の努力で得られる最大の物質的安楽で満足してしまいます。このようにして人間は不完全で不安定な平和をつくり出すわけです。このような平和は、神の子であり神の似姿としての人間の尊厳には基づいていないというのに。みなさんはみせかけの平和などで満足してはいけません。これは重大な誤りであって、結局がっかりさせられるだけですから。イエズス・キリストは御昇天の前、弟子たちにおおせになりました。「私はあなたたちに平和を残し、私の平和を与える。私はこの世が与えるようにしてそれを与えるのではない」(ヨハネ14・27)と。

平和には二つの種類がある

一つは自力でうちたてることのできる平和、もう一つは神の賜である平和。一方は力のバランス、協定と契約に基づいた平和であり、他方は第二バティカン公会議の「人間社会の創造者である神によって社会の中に刻み込まれた秩序の実り」である平和。武力によって得る平和と心で生まれる平和。最初のは危くて不安定、みせかけのみの平和にすぎません。というのは怖れと不信がその根であるから。二番目のは強くて永続する平和です。正義と愛による平和であるから。そしてこれは、神の掟を愛する人に神が授ける賜です。(詩篇119・165)　最初のはむしろ休戦と称すべきものであり、二番目のは「人知を越える神の平安」(フィリッピ4・7)であって、人間をほんものの平和の作り人にするものです。

――＊――＊――

平和とは、聖アウグスティヌスによれば偉大な恵みであって、太陽のように、雨のように、また人生における他の数々の助けのように、真の神からそそがれる恵みですから(神の国3―9)、私たちは来る日も来る日も、謙遜に、忍耐強く、休みなしに、乞い願わなければなりません。

――＊――＊――

平和への望みとは、人がまず自らの生活のなかで得るよう努力するものです。ただ望むだけというような単なる忍従であってはなりません。聖アウグスティヌスの古典的定義によると、平和とは秩序の静けさ(神の国19―13)、すなわち、全てが神のお望みのままの正しい秩序に従って平穏な状態にあることだと言われます。神との正しい秩序や他人との秩序を守らない人は、自らの利己主義のからに閉じこもっているわけですから、自分の中の調和はおろか周囲の世界の秩序も得ることはできないでしょう。せいぜい得ても詩篇の言う(73・3)罪人の栄えがおち。その栄えは浅く、使徒聖ヨハネの語る三つの欲に降伏することに外なりません。(ヨハネ①2・16)

世界が切に望んでいる平和は、人間が神の恩寵に協力するときに受ける聖霊の実り(ガラツィア5・22)です。この平和は授かるものであり、同時に獲得するものであります。というのも、人間の心に巣をはり死の実しか結ばない偽りの約束、すなわち罪に対して、休まずに戦った末に手に入れるものですから。

属人区オプス・デイは、メンバーとその使徒職に参加する人々に深いキリスト教的形成を与えます。その形成は、現世的なことについては自由と責任をもって行動せよと勧めるものです。このような形成において祈りと秘跡をたびたび受けることはキリスト教を最高に生かすために、そして平和をもたらすために、根本的に大切な条件であります。国際平和をつくる人だけが神の子と言われるのです。(マテオ5・9参照)　この道を進んで行ってください。みなさんの友人たちにも、仕事において、また日常生活において、神に近づくことがいかにすばらしい経験であるかを自分で発見するよう招いてあげてください。(一九八六・三・二十二)

〈教理省総会でのお話〉ゆるしの秘跡

最近、教会内で、途方に暮れている人々がいることは周知の通り。あちこちで司牧の方法が、教会の正しい教え、教会法でも確認されてある正しい教えと一致していないからです。

総会中みなさんがとくに検討されたのは次の二点でした。㈠初告解の時期、㈡グループを対象とした一般赦免。㈠については、この秘跡の本質に関する誤解が相変わらずあとをたたないという点を考慮すべきです。個別(地方)教会と普遍教会の両方で要理教育に力を入れているにもかかわらず(『和解と悔悛』をあげれば充分でしょう)、赦しの秘跡のよろこびにみちた、また人間を自由にする力については充分に知られていません。よい心構えで告白におもむくなら、信者は排斥を宣言する正義ではなく、〈赦しを与える愛〉を体験できるはずです。そしてその体験は、キリストの暖かい光を受けて、痛悔の心をもつ信者がみずからの弱さや気質に見られる欠点、自らの欠点の複雑な

説教・講話・書簡等の抄訳

影響力を教えてくれるのです。しかし、だからと言って、精神的な挫折を感じたり衝撃を受けたりするわけではありません。痛悔している人は自らに罪ありと認める行為のうちに、辛抱強くまことに慈しみ深い主を見出すからです。

というわけで、良い準備をさせてこの秘跡を受けさせるなら、自分を知る、自分を巧くコントロールする、負けてしまうのではなく欠点を欠点として受け入れるという点で、子供たちは均衡のとれた発達をどんどん遂げて行くことができるでしょう。何歳になれば重大な罪を犯しうるかという問題は別にして（分別をもつ年齢を遅くみなすなら、成長過程にある子供への信頼を多分に欠くことになるという事実を見過ごすわけにはゆきません）、たとえ小さな道徳的悪であろうとも、すこぶる重大であること、とりわけ人としてキリスト者としての成長過程を教育の面から見るならば、このような事柄はさらに重要な意味をおびてくることに変わりはないのです。

子供の告白を聞くには準備がいる

司祭のなかに子供の告解を聞くためのふさわしい準備のできていない人がいることは認めざるを得ません。（だからこそ将来の役務者の教育が大切になってきます。）子供たちが恩寵の秘義に近づく権利を剝奪されないようにしなければなりません。「子供たちを私のもとに来させよ」（マテオ19・14）とおおせになった御方こそ、この秘跡の授け手なのですから。（…）

一般赦免

二番目の一般赦免、つまり前もって個別の告白をせずにグループに赦しを与える形式については、残念ながら次の点を指摘しなければなりません。すなわち、教会法の961から963および『和解と悔悛』(33)で明確な指示が与えられているにもかかわらず、数多くの教会で一般赦免を濫用する傾向がみられると。

この形式については、それが例外的な方法であって自由に採用できるものではないこと、これを再確認するのが私の義務であります。（…）

司牧者は適切な要理教育を施し、信者の間に一般赦免と個別赦免の関係を正しく理解してもらわなければなりません。たとえ重大な罪に対する一般赦免を受けたときでも、なるべく早く個別に告白をする義務が残っているのです。（…）

そうするにあたり、信者の方々が告白をただ義務としてでなく、自らに固有な権利であると理解できるよう助ける必要があります。（…）赦しの秘跡の授与者（聴罪師）との個人的な話によって、信者各人は、耳を傾け、同情をよせ、赦してくださるキリスト、十字架につけられたキリストと、より一層パーソナルに出会う権利を行使することになるのです。（…）

教会はこのような点を強調することによって、信者一人ひとりの唯一独自の主観を守ります。この主観性は、匿名の大衆や共同体がいかにゆたかで大切と言えども、それらに取って代わられるべきではありません。

（一九八六・四・十七）

働き人を！

「収穫は多いが働き人は少ない。」（ルカ10・2）召しだしを得ること、これは私たちの大きな関心事です。どうすれば召しだしを得ることができるのでしょうか。使徒聖パウロは次のように言っています。「さて、主の囚人となった私はあなたたちに勧める。あなたたちはお召しにかなうように生きよ。」（エフェゾ4・1）

私も同じことばをみなさんに繰り返したいと思います。みなさんが、信者として、司祭として、修道者として、それぞれが自分の召しだしをしっかり生きることこそ、新たな召しだしの生まれるみなもとです。自らの召しだしに首尾一貫した生き方こそ、祈りのための永続的な基礎となるのです。そのような生き方は祈りを準備し、またそのような生き方が花を咲かせたもの。同時に祈りはたえず召しだしへの忠実を保つ生活に潤いを与えます。

――＊――＊――

司祭、修道者としての召しだしが生まれるためには、キリスト教的な雰囲気、福音の黙想、そして家庭や教会における生き生きとした証しが必要です。金持の青年に対してキリストが最初におたずねになったのは、掟を守っているか、という点でした。何にもまして正しい生活、良心に従った生活が必要です。こうして初めて、そのような生き方の冠として、ある意味では完成として、自らの一生をささげる決心のできる人が生まれてくるのです。召しだしが生まれるには、道徳的な生き方、仕える精神、寛大に自らを与える心が要求されます。なかんずく、祈りの雰囲気が必要です。キリストと語り合う習慣を身につけること。また、子供たちには幼いときから祈る習慣をつけてやってください。

――＊――＊――

召しだしが生まれるか否かについて、みなさんの責任は重大です。

キリストに仕えるよろこびを身をもって示すことができれば、日々の労苦のうちにあっても信仰のおかげでみなさんが希望の光を輝かせるならば、みなさんが人々のためにできるだけ努力するなら、みなさん自身の日々の生活をみたす祈りを人々に伝えるならば、そうするなら、みなさんのまわりに召しだしが生まれて来ないはずはありません。（八五・五・十六）

練獄の霊魂のために

1

「おびただしい数えきれぬ大群衆が現われた。」（黙示録7・9）

本日教会は、黙示録の著者と共に、信仰の目を鋭くして諸聖徒の秘義を考えたいと思います。

私たちは世界中の教会と心を一つにして、使徒信経の次の秘義を宣言します。

「普遍の教会を…信じます。諸聖人の通功を…、体の復活、永遠の命を信じます。」

教会、すなわち父の家をめざして地上を旅する神の民の信仰は、諸聖徒の交わりという秘義におよんでいます。

この信仰によって私たちは、地上にあって、神の御母聖マリアを筆頭にすべての聖人たちの取りなしと取り次ぎを求めることができるのです。それのみか、聖人たちの残してくれたお手本に従って生きる励みが与えられています。

2

諸聖人において「父から注がれる愛」が最も深い意味で成就します。これは本日の第二朗読にあるように、父の愛は今日なお私たちが「神の子である」（ヨハネ①3・1）という事実から明らかです。しかし、「後にどうなるかはまだ示されていない」（同3・2）　使徒は続けて、「それが示されるとき、私たちは神に似た者になることを知っている。私たちは神をそのまま見るであろうから」（同3・2）と教えています。

「主は清い御方」（同3・3）です。神を「顔と顔を合わせて」（コリント①13・12）「あるがままに」見る人は、決定的に神の聖性にあずかる人です。こうして自分自身も聖となるわけです。このように、永遠の生命

不変の教え

は諸聖徒の交わりの秘義のうちに明らかとなります。

光と生命

3 教会は、本日のミサで記念するこの秘義から、明日祝うすべての死者の記念に目を向けるよう私たちをいざないます。私たちは墓地を訪れ、愛する人々の墓の前に集まります。埋葬場所のわからない死者のことをも思い起こしてください。地上の生から永遠の生への敷居を越えて行ったすべての人々のことを思い起こしてください。彼らのために祈りましょう。

教会は、とりわけ旅の途上で浄めの苦しみに耐えている練獄の霊魂のために祈ります。

先ほどことばの祭儀中に味わった詩篇は彼らについて歌っています。

「だれが主の山に登れよう。だれがその聖所に立てよう。それは手の清く、心の純な者。」(詩篇24(23)・3)

4 地上の生と永遠の生との境であるこの場所で、私たちは主キリストに感謝したいと思います。福音の光と、私たち人間の生活を照らす至福八端の光を与えてくださったから。

それは天の王国の光。神を見ることを可能にし、究極の慰めとなる光です。すべて心の貧しい人、苦しむ人、柔和な人、義に飢え渇く人、心の清い人、あわれみある人、平和のために働く人、正義のために迫害される人々を照らす光です。至福八端のメッセージは、まさにこの人々のことを指しています。

諸聖徒の交わりは福音の真理を通して注がれます。救い主はおおせになりました。「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう」と。(マテオ11・28)

主に感謝しましょう。福音の光を送ってくださったから。永遠の命を告げる良き知らせを伝えてくださったから。

5 神の小羊の秘義についても、主に感謝しましょう。

黙示録の著者が、世の終わりのまぼろしの中で見た、「おびただしい大群衆」のただ中に座しておられるのは主御自身です。

「彼らは大きな患難を抜け出た人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くした。」(黙示録7・14)

彼らは贖いのしるしを身におびて大声で叫びます。「救いは…われらの神と小羊のものである」と。(黙示録7・10)

ご一緒に、神の小羊の秘義に対して、その受難と死と復活、世の贖いについて、感謝しましょう。これこそ私たちを永遠の住まい、諸聖徒との交わりへと導いてくれるからです。

6 キリストにおける兄弟姉妹たちの墓前で、永遠の命への信仰が新たになります。黙示録に見える「おびただしい大群衆」の中に身をおいてみてください。

私たちは、神を捜し求める信仰の民です。

「地とそこにあるもの、世とそこに住むもの、すべて主のもの。」(詩篇24(23)・1)

主は永遠。永遠の生命は、主のもとに。

「だれが主の山に登れよう。だれがその聖所に立てよう。見よ、それは主を求める者のやから、生けるヤコブの神の尊顔を慕う人々。」(詩篇24(23)・6参照)

7 私は、普遍の教会を信じます。諸聖徒の交わり、罪の赦し、永遠の命を…信じます。

永遠の命、神からの光が世を去った人々を照らしています。地上の私たちも、信仰に導かれて、同じ光の中を歩みたいものです。(八五・十一)

家族の祈り

小教区とは何でしょう。小教区とはまず第一に、祈りの共同体です。教会の建物内に集い、聖体祭儀に与ったり教会の祈りを一緒に唱えたりするときだけに限りません。みなさんが、家族と共に家庭で、仕事の場で、あるいは家から離れてレクリエーションに時を過ごすとき、祈るなら、それも祈りの共同体として祈っていることになるのです。

どこででも、色々な方法で祈らなければなりません。主イエズスは「うまずたゆまず祈れ」(ルカ18・1参照)とおおせになりましたから。

家族共同体での祈りはすこぶる大切です。親が子供たちと共に祈る、夫婦が共に祈る、婚約者同士が一緒に祈る――大切なことです。祈りを通してこそ、家庭は「家族教会」となります。家族教会のことを昔の著述家は「エクレシオラ」(小さな教会)と呼んでいました。

ところで、家庭ばかりでなく誰もが、つまりキリスト者一人ひとりが、使徒の言葉を借りれば「神の聖殿」であります。それゆえ心にとめておくべきことは、ひとりひとりが必ず祈ること、誰も祈りから遠ざからないこと、誘惑や霊的怠け心に負けて祈りを止めないこと、と言えます。たとえ大変な努力を要しても、とにかく祈りにもどることです。

かくして祈りこそ、キリスト者そして人間生活の根本となります。

祈りはまた小教区の基盤でもあります。小教区とは何よりも祈る人々の共同体であるからです。それは同時に祈りの学舎であり、またそうでなければなりません。信者は口禱や聖歌を知るべきですが、念禱つまり心の祈りを忘れることがあってはならないのです。

祈り祈り祈り

使徒職は祈りから

祈りはキリスト教共同体の第一にして根本的な使徒職です。祈りの使徒職であると同時に祈りによる使徒職でなければなりません。ここから小教区の福音宣教への責任が生まれます。聖パウロがコリント人へ書き送った責任のことです。「私が福音をのべないなら、禍いなことだ。」(コリント①9・22参照)祈りがないと人は内的(霊的)に乾燥し、自分中心の利己主義の殻に閉じこもり、結局は霊魂を失う。天の国のため、平和のため、正義のため、愛のために、人々を獲得することはできなくなる。

祈るイエズスは、私たちの弱さを自ら負い、病を引きうけ、「心砕かれた者をいやす」御方(詩篇146(147)・3)です。(…)

祈りに成長しよう

この小教区も多くの教会と同じく、誤った刷新への動きの影響をうけました。しかし主の霊は教会を見捨てず、(…)公会議のほんものの実りと本物の刷新への道が開けてくる兆が見えています。不安材料はまだまだ残っている。しかし、がっかりせずに、真心から神の勝利を望み、自分の弱さにも驚かないように。神はつねに一緒にいてくださいますから。

(…)小教区の生活において祈りがいかに大切であるかをお話しました。祈りの道に進歩するよう努力してください。謙遜で誠実な熱意のこもった祈り、個人あるいは共同の祈り、典礼上の規定を守ること、これこそ愛徳実行の種、本物の霊的刷新の原理、私たちの魂の危険に対する防禦です。祈りこそ、小教区の魂なのです。

(一九八六・二・十)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393